

# 更級への旅

松尾芭蕉が歩いた 更科紀行街道の今・その33

俳人、松尾芭蕉が当地の月を見るためにした旅の紀行文「更科紀行」の中には、全部で十三の句があります。美濃（岐阜県）を出発し木曾路をたどったときに詠んだ一つが次の句です。

かけはし  
棧やいのちをからむつたかつら



①

## 「木曾の棧」岩壁の道だった

木曾路は江戸時代、江戸と京都をつなぐ大動脈、中山道の一部ですが、中山道の別名でもあるくらいに旅人にとっては感慨深い街道として知られており、「木曾の棧」はその言葉だけで全国のフレーズです。シリーズ139で紹介した旅館「さらしなや」さんの女将、安藤みね子さんのお知り合いで木曾路について大変詳しい観光ガイドの蓑島悦子さんに現地（写真②）、木曾郡上松町）をご案内いただき、この句が、どのような経緯でできあがったのかよく分かりました（蓑島さんは写真①の左、右が安藤さん）。

▽たいまつ火の燃失

昔「かけはし」という言葉を初めて耳にしたとき、まずイメージしたのは「架けた橋」のことでした。普通、橋は水が流れる川の両岸に架けるもので

あいを流れる木曾川の上に架かるから、余計に風情があるように見えたくらいにしか思っていないませんでした。違いました。もともとは崖につけた木の道が「かけはし（棧）」でした。蓑島さんが現在の棧のある場所に設けられた公園で、解説板に載る初代の棧の様子を描いた絵図を見せてくださいました。③の写真です。崖に丸太を立て、その上に板を並べ人が通れるようにした道です。構造は川に架ける木の橋と同じなので、それで「架け橋（棧）」と呼ばれたことになりました。急斜面の土を崩して作れば普通に山道なので、この一帯は、岩でできているので、木と板で組むことでしか道ができなかったのです。

ただ、木は火に弱いのです。案の定江戸時代初期、この初代架け橋はたいまつ火の不始末で燃えてしま

## 土中から引き揚げられた芭蕉句碑



⑥



⑤

ました。芭蕉が更科紀行の旅をした一六八八年より前のことです。ですから、芭蕉がここを歩いたときには、丸太組みの橋ではなく、すでに石を下から積み上げた道になっていたことになりました。

ここで面白いのは、この街道を管理していた尾張藩は、この石垣を最初④の絵図のように間を中空にし、木の橋を架けていたことです。外敵が来たときは、この橋を落として防壁する工夫だったそうです。それがやがて木の橋ではなくすべて石垣が組まれるようになり、また一度②の写真をご覧ください。中央の石組みが左右と違いますが、あとから積み上げた証拠ではないかということ。芭蕉がここを通ったときは、また石垣に渡された木の橋だったようです。現在の道は車

が通れるほどに幅が広くなりコンクリートの柱が支えています。芭蕉の時代は石垣の幅ぐらいいしかなかったことになりました。

そこで冒頭に紹介した「棧やいのちをからむつたかつら」の句についてです。芭蕉の時代はすでに石垣の道で厳密には棧ではもうありません。しかし、芭蕉の頭の中には、つたで丸太や板を縛り組み上がった棧のイメージが強烈にあったのです。

今のように鉄筋やワイヤーはないし、稲わらでは弱いので、山の中にある蔓科の樹木をねじって丈夫にしロープ代わりにしたのです。棧の材料をつなぎとめている蔓科の植物のおかげで旅をする人間の命もつながっているというようにイメージを詠んだのが「棧や…」の句となるわけです。芭蕉の時代はすでになかったのに、芭蕉がこの句を残したということは、それほどに初代の木曾の棧が全国に有名だったことの裏返しです。

▽3つある棧句碑  
蓑島さんから棧の句碑にちなむ興味深いお話を聞きました。現在、棧句を刻んだ石の句碑は三つあるのですが、初代の句碑（写真⑤）はがけ崩れで土中に埋まってしまったのが発見されて現在は北に約七キロ離れた木曾町福島津島神社の境内にあるということです。

初代の句碑は、江戸時代中期（元号だと宝暦、明和）、棧を訪れた美濃の俳人咄々坊が建てようとしたが、果たせず亡くなってしまい、咄々坊の友人で木曾町福島の人、それまで木曾であったものを石碑として建てたそうです。地中に埋もれていたこの初代の句碑が明治に発見されました。

見つけたのに、別の地である木曾町福島にあるのは、崖くずれ後の文政十二年（一八二九）、美濃の友左坊によって新しく二代目がすでに再建されていたことも関係しているようです。ただ、初代句碑への思いは強かったのか、昭和になって上松町の有志が古い句碑は棧にあってこそ意義があるとし拓本をとり、自然石に彫って建立したものがあつた。棧句への木曾の人たちの愛着がうかがえます。

二代目の句碑の隣には木曾を旅した近代俳句の創設者、正岡子規が紀行文「かけはし」の中に残した句歌の碑（写真⑥）もあります。句は「かけはしやあぶない処に山つつじ」棧や水にととかず五月雨、短歌は「むかしたれ雲のゆききのあとつけてわたしてそめけん木曾のかけはし」です。

案内してくださった蓑島悦子さんは木曾路の観光スポットを手書きで克明に記録した案内図をつくった方で、それが木曾観光連盟の現在の中山道案内図「信州木曾路 中山道を歩く」につながっています。漫画家・絵本作家のすぎ大和さんによる単行本「まんが松尾芭蕉の更科紀行」と絵本「ばしようさんとおぼすて山の月」の中にも棧が登場しています。



②



④



③

発行 二〇一一年 七月七日  
編集 さらしな堂  
（代表・大谷善邦）  
千三八九・〇八一三  
長野県千曲市大字若宮二八四・六  
（旧更級郡更級村）